

藤原 信様

栃木県鹿沼市

加園一〇〇五 二 小林 守

お久しぶりです。お元気なご様子のお便りをいただき、嬉しさと懐かしさがこみ上げてきました。

このたびは先生の著書、タムとの闘い・忠川開発事業反対運動の記録・緑風出版・をご恵送いただき誠にありがとうございました。ページを開くのが少し遅れてしまいました。が拝読いたしました。読み始めましたら、目が離せなくなりました。徹夜で読み切るようになりました。懐かしさと同時に、のびきならなかった民主党衆議院議員時代、私の地元で直接かかわる水資源開発環境政策課題(東大芦川ダム中止と忠川開発事業の全面見直し)に取り組んできたその当時の思いや国・県市の政党政治状況の乖離・分裂、未成熟の苦悩がよみがえりました。また政権を取った今の民主党への失望もしかりです。いま「ユークリート」から緑のタムへの転換し大型公共事業の復活が野田政権によって進められています。さらに日本の環境エネルギー政策問題としての福島第一原発震災の問題は、直接人々や生きもののいのちの基盤に関わる人災問題であり、政治家であるなしに関わらず人間として「脱原発」に強い関心と民主党の政治的対応に極めて強い不信感と何といつまでも「と言いつつ失望感を持たざるをえません。大飯原発の再稼働しかり、原発の輸出などもってのほかだと思います。戦後最大最悪の政財官学の国家的利権構造が震災後明らかに露出されました。無力感に苛まれることもありますが、出来ることを何かやらねばと思います。「たんぼ舎」経由で「脱原発一千万人署名」に個人的に取り組みました。

まじめだったけれど未熟だったその頃の政治家の私について、そして私の人生の転機ともなり政治家断念の生き方を選択したときの思いが昨日のことのように蘇ってきます。といつのも、今の私の生き方がそのときの選択の方向を、ずっと引きずって来ているからであります。政治家を辞めたこの間、臍をかむような思いがなかったかと言わないとは言えませんが、政治家を断念した以上は、非詩的な政治の世界や人間の生きざまの中から、あえてそれを文学的課題にして思想的に乗り越えていきたいと考え、詩作などを細々とやってきました。

先生も小竹森さんや石原さんと、私の家に来て下さったことがありましたが、市長選出馬への意向打診に対して、闘える条件や大義が整うならばといつかご了解したと言っていました。出身労組市職労は反対の意向、勿論民主党県連や自治労県本は福田知事誕生の選挙のこともあり問題外、阿部市長とは縁戚関係もありで、家族親戚の猛反対、それら極めて困難な状況を無視してあえて市長選に出るからにはそれを超える大義と勝てる見通しが一定程度見えなければ決断できなかったというのが政

治家だった当時の私のきりきりのことでした。その時点ですでに東大芦川ダムは福田知事誕生で中止は明らか、南摩ダムも全面見直しになるといつことが見通せる状況でした。ですから鹿沼出身の前衆議院議員が惨敗のリスフを抱え、家族と親せきと出身労組と地域の多くの支援を頂いてきた親しい人達を失ってもやむを得ないような政治的大義は見いだせなかったということなのです。従って出馬断念を伝えたのはおよそ一月前でしたが、大義及び闘える条件整わずと判断したことであり、決して騙したのではありません。しかし結果的に騙されたと政治的に受け止める他者の感性を変える術はありません。つまりは私の不徳の致すところ、受けとめておくしかないのでしょう。残念で寂しいのですが。

小竹森さんの書いた第五章では

亦林守前衆議院議員を鹿沼市長に当選させて南摩ダム建設を中止させ、鹿沼市の財政悪化を防止しようと考えた。当人の了解も得たので鹿沼市の市民団体と相談したところ、全面的に協力するということになり、「鹿沼を変えよう市民の会」を結成し、三ヶ月間の運動が始まった。……このように常に政治第一主義とも言うべき方向に考える方には、私的情況から反論してもよくは伝わらないと思われませんが、しかし寂しいことです。政治家に対しては個別政策協定を結んで自己目的のために利用することは今日の大衆消費市民社会の当然のことかもしれません。政治が益々小さくなり、「詩念」のある政治「から遠のかせていくことになり、これまた寂しいことではないかと思えます。政治家であって、環境問題に党内で深く関わってきたと自負してきた自分からすれば、先生には個人的な背景についても、ご理解いただければと思います。

小泉新自由主義旋風のもと、森山真弓さんに敗れた二〇〇三年の衆院選後、蓄えもなく当時、生活するための仕事の必要性はありましたが、教育長職就任に自らの政治的他意はありません。教育長職四年間は、公務員生活通算約二〇年のうち、最もよく勉強し本を読み充実して仕事に取り組めた年限ではなかったかと思えます。荒れすさんでいた市内中学校等の再生対策、不登校対策、特別支援学校、学級の充実などに苦勞したことが鮮やかに記憶に残っています。教育長職を引きつけたのが市長選断念の取引だったような印象の記載になっていますが、それは違つていじや。阿部市長の思惑がどうだったのかについては関知しません。その話があったのは市長選後一年ぐらいつてからだったと思います。二期八年の前西山教育長が任期満了で退任する後に要請されたわけです。教育委員会には市長部局とは相対的な独立行政機関の機能が認められており、政治的には中立の必要性が担保されています。また、教育長職の選任は、政治家を断念した後の仕事として、人生一度は関わってみたかった仕事のひとつだったので引き受けました。なぜなら、大学選任の時には、高校の担任の先生の影響もあり、将来学校の教員（中高校等）になつてもいいと思つて、東京教育大学で史学科を専攻しました。家永三郎教授の日本史専攻でした。しかし筑波移転反対闘争に関わつてきた最後のころに、歴史の勉強はあまりやらずに卒業してしまい、教員試験には

不合格になり、何でもいい生きていければいいやという気分です。市役所の試験を受け、公務員になつてしまつたといつ経緯があります。学生のころは、社会科学よりも文学や哲学に偏つて本を読んでいました。いかに生きるか、生きる意味は何か、こんな青くさい問いが頭を占有していたからでした。でも今も私を問い続けてくる問いに変わりません。もう青臭いといつてはられない古希近い年齢になりました。公務員をやめ政治家をやめ教育長をやめ、そして今学生時代の延長のように主に文学の本を読み、詩作活動に取り組んでいます。鹿沼市文化協会の副会長や生涯学習大学の詩の講座の講師などボランティア活動よろしく、伴侶には文句を言われつつ、自分勝手に、でも結構充実して書らうとします。

思いのままを書いてしまつて相済みませんが、先生の著作に触発されて、今の私の心境や政治家断念の経緯などについて、その一端を書かせていただきました。失礼をご容赦ください。苦く辛かつたあの当時の思い出にも、今は真剣にまじめに生きてきた証として深く懐かしし思いがわいてきます。ありがとうございます。

このたびのお返しに、拙著ですが詩集「大芦川水神考」を同封いたします。「高覧ください。表題の詩は私のふるさと、母なる川への思いを書いたものです。石原政男さんには亡くなられる数カ月前でしたが、お家に届けに行きお会いしてはらく話し合つてことができました。その際、石原さんから「東大芦川ダム問題では、議員時代大変世話になつた。」といつお話を頂き、ひたすらに、がむしゃらに運動をしてきた人たちの私の一抹の負い目感を払拭することが出来て嬉しかったことを思いだします。機会がありましたらお会いしていろいろお話を伺い出来ればと思います。ありがとうございます。

平成二十四年六月六日